基礎老化研究 46（3）; 53－54, 2022

【著書紹介】

老化研究最前線

“Aging Mechanisms: Longevity, Metabolism, and Brain Aging”（2015）“Aging Mechanisms II: Longevity, Metabolism, and Brain Aging”（2022）の紹介

森　望
福岡国際医療福祉大学・医療学部・教授

『Aging Mechanisms』（Springer, 2015）を出したのはもう７年も前のことである。東アジアの隣国である日本と韓国の研究室で進められている老化研究の最先端情報をとりまとめたものだった。元はと言えば、2006 年に長崎から、要は日本の最西端の大学に赴任して、地の利を生かして始めたディスカッションフォーラム、AACL（Asian Aging Core for Longevity）と称した二国間の基礎老化分野での主に分子系の研究室間の自由闊達な議論の場、そこでの科学の発展系としての研究成果をとりまとめたものだ。ほぼ十年を経た AACL は、後半は日本学術振興会のアジア研究教育拠点形成事業の支援を受けて、のべ 300 人ほどの日韓の若手、中堅、そして熟年の研究者たちの賑やかな研究交流の場になったと自負している。そこでの啓発や知己が糧になって、その後も精力的に基礎老化研究分野で活躍している若者が多くいることを願ってやまない。

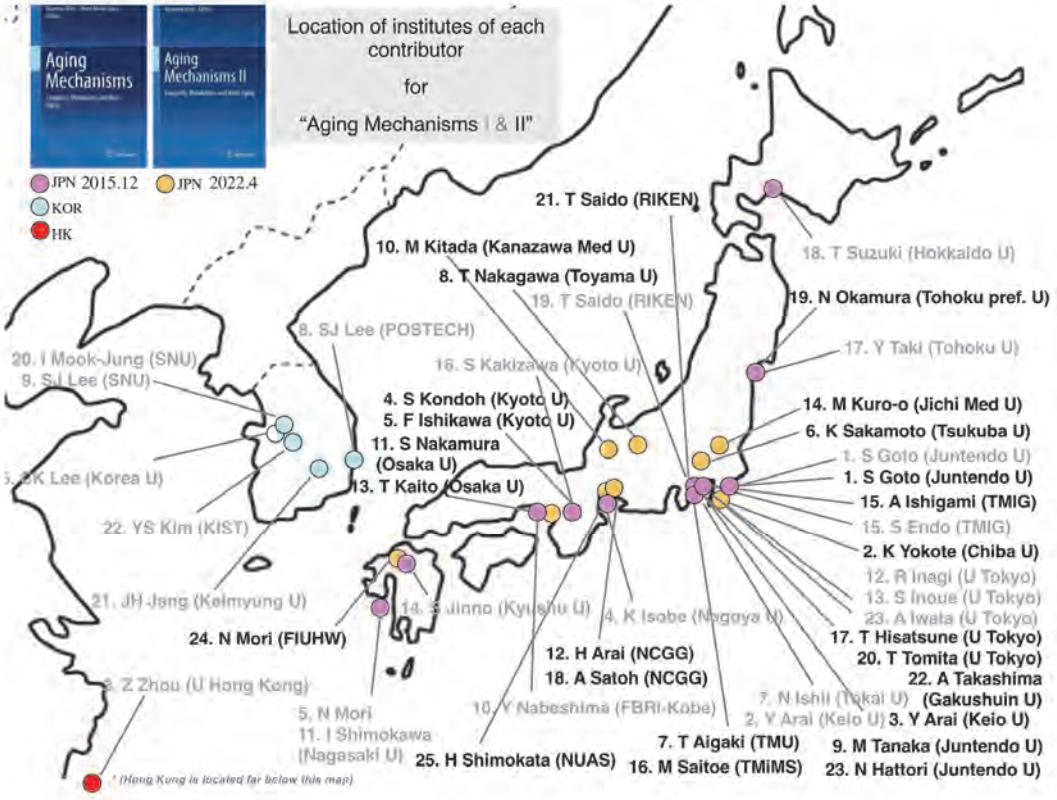
そんな言い方をすると、「なんとも年寄り染みて。。。」と思われるかもしれない。しかし、それが現実である。老いは誰の身にも訪れる。医者も病気から逃れられないように、老化研究者もまた老化の現実から逃れることはできない。定年になって、研究室がなくなれば、もう研究はできない。それがグサっと突き刺さる、そんな時がいつかはくる。私の場合は、もうとうにそれが来た。「老化研究者」から「老化研究」を取り去ったら、それはただの「者」、つまり、ただの人、になった。

日韓の老化研究フォーラム AACL は十年を経て発展的に解消した。その後は香港大学の Zhongjun Zhou（周中軍）が中心になって、日中韓三ヶ国の老化研究フォーラムが立ち上がったと聞く。その後の活動状況はよく知らないが、二国間の礎をもとに、より大きく羽ばたいてくれれば、そのタネを撒いた人間としてその広がりをうれしく思う。

さて、定年で研究室を閉じてしまうと、それなりに余裕もできた。金銭的な余裕ではなく、ただ時間的な余裕なのだが、それで何か科学的なことをとあれこれ考える中で、あの『Aging Mechanisms』の続編に思い至った。コロナ禍で日韓の行き来もままならない中だが、どこであれメールとズームでやりとりはできる。もう出張などもいらない時代になった。お手軽だが、寂しくもある。でも効率的であることは確かだ。また日韓で、とも思いはしたが、今度は日本だけで取りまとめてみることにした。Springer-Nature 社の書籍部門に電話して、全体の構想を伝えた。全体の流れは前回とほぼ同様、老化学説、老化症と百寿者研究、細胞老化と個体老化、線虫モデル、ハエモデル、寿命遺伝子、代謝制御、神経制御、脳老化、神経変性疾患としてのアルツハイマー病とパーキンソン病、そして今後の老化制御へ。そんな流れを考えて、思い当たる人々へメール連絡。あとはメール交信を繰り返して、令和の時代の日本の基礎老化研究最前線が見えてきた（付図参照）。

こうしてできた『Aging Mechanisms II: Longevity, Metabolism, and Brain Aging』（2022）。これが現状のとりまとめに留まらず、次世代の老化研究へと若い研究者たちの糧になって、次の問題へチャレンジしていただく、そんな素材となってくれることを願ってやまない。個人で買うには高い本だが、老化研究グループのいる大学や研究所であれば、是非その図書館へ「お勧めの一冊」として活用いただければ幸いです。

連絡先：森　望
〒 814-0001　福岡市早良区百道浜 3-6-40
TEL：092-832-1200
E-mail：morinosm@takagigakuen.ac.jp



"Aging Mechanisms"（日韓老化研究最前線）（2015）と
"Aging Mechanisms II"（日本の老化研究最前線）（2022）の著者分布図